

山形県レッドリスト（植物版）の改訂について

1 経緯と目的

県では、絶滅のおそれのある野生生物の現状を明らかにし、県民の皆様への理解を広めるとともに、保全対策や各種事業の環境影響評価等への基礎資料として活用するため、ほ乳類、鳥類、は虫類、両生類、淡水魚類、陸・淡水産貝類、甲殻類、昆虫類及び維管束植物について、2003年、2004年に山形県レッドリスト（注1）を策定しました。

また、レッドリストをもとに2003年3月に「レッドデータブックやまがた」動物編、2004年3月に植物編（以下「山形県レッドデータブック（注2）」という。）を発刊しています。

野生生物の生息・生育状況は常に変化していることから、レッドリストやレッドデータブックは、定期的に現状を反映した内容に見直す必要があります。

このため、山形県レッドデータブックが発刊されてから約10年を経過し、新たな情報や知見も蓄積されていることから、平成21年（2009年）から植物編の改訂作業を開始し、動物編についても、順次、分類群ごとに調査等を進めています。

注1：生物学的観点から野生生物の絶滅の危険度を評価し選定した種のリスト

注2：レッドリストに選定された野生生物種について、その分布、生息・生育環境、絶滅の要因などをとりまとめて編纂したもの

2 評価、検討

評価対象種の選定、絶滅の危険性等の評価にあたっては、県内を熟知する学識経験者、東北地域の状況や最新の種の分類等を熟知する隣県の学識経験者、地元の研究者で構成する「山形県レッドリスト等掲載種選定委員会（植物）」を平成24年度に設置し、検討を行いました。

維管束植物（シダ類、裸子植物、被子植物）については、調査基礎データのほか、新たな情報や知見等も踏まえて評価しました。

【山形県レッドリスト等掲載種選定委員会（植物）委員】

氏名	所属等	敬称略 備考
横山 潤	山形大学理学部教授	委員長
黒沢高秀	福島大学共生システム理工学類 准教授	
米倉浩司	東北大学植物園 助教	
鈴木 暁	山形県植物調査研究会	
高橋信弥	山形県植物調査研究会	
沢 和浩	山形県植物調査研究会	
佐藤靖夫	フロラ山形	
伊藤 聡	フロラ山形	

藻類についての評価、検討は、山形大学名誉教授 原慶明氏の指導により実施

3 今回の改訂の特徴

初版の植物編のレッドリスト及びレッドデータブックについては、「維管束植物」を評価対象としましたが、今回の改訂では、「蘚苔（せんたい）類」（コケ植物）、「藻（そう）類」も評価対象に加え、国レッドリストを参考に、過去の調査資料や文献をもとに評価、選定を行いました。

4 評価対象等

- (1) 種、亜種及び変種を評価の単位とし、品種や雑種は評価対象から除きました。
- (2) 帰化種、移入種、外来種等は評価対象から除きました。
- (3) 藻類については、淡水産藻類を評価の対象としました。

5 カテゴリー（選定基準）

山形県版レッドリストカテゴリー及びその定義は、環境省レッドリストカテゴリー（2007年）に準拠しました。

【山形県版レッドリストカテゴリー】

絶滅（EX）	過去に生育したことが確認され、すでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅（EW）	栽培下でのみ存続している種
絶滅危惧Ⅰ類	絶滅の危機に瀕している種
ⅠA類（CR）	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種
ⅠB類（EN）	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	絶滅の危険が増大している種
準絶滅危惧（NT）	現時点では絶滅の危険度は小さいが、生育条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
情報不足（DD）	「絶滅危惧」に移行する可能性はあるが、評価するだけの情報が不足している種

※太字内の絶滅危惧Ⅰ類（CR、EN）と絶滅危惧Ⅱ類に該当する種が絶滅危惧種

6 改訂レッドリスト

	前回（初回） （H15年度）	今回 （H25年度）			
		維管束植物	維管束植物	蕨苔類 （コケ植物）	藻類
絶滅（EX）	39	41	—	—	
野生絶滅（EW）	1	1	—	—	
絶滅危惧Ⅰ類	ⅠA類（CR）	154	176	21	5
	ⅠB類（EN）	86	129		
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	106	159	8	2	
（絶滅危惧種 小計）	346	464	29	7	
準絶滅危惧（NT）	38	25	8	—	
情報不足（DD）	38	5	6	—	
合計	462	536	43	7	

※蕨苔類、藻類については、Ⅰ類、Ⅱ類での評価とし、ⅠA類、ⅠB類の区分をしていない。

7 レッドリスト見直し等の概要

（1）維管束植物

今回の改訂で全体では536種が選定され、前回レッドデータブック（2004年）（以下「前回RDB」という。）（462種）と比較すると74種の増加となりました。

また、絶滅危惧種の総数は、前回RDBでは346種でしたが、今回は464種（絶滅危惧ⅠA類（CR）176種、絶滅危惧ⅠB類（EN）129種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）159種）となり、118種増加しました。

今回の改訂で、減少要因として最も多かったのは「自然遷移」で、次いで「園芸採取」、「産地極限」、「森林伐採」、「土地の造成」となっています。「池沼開発」、「湿地開発」、「道路工事」などの要因は減少し、「自然遷移」、「管理放棄」、「踏みつけ」などが増加しています。

特に、自然遷移、管理放棄が増加しており、湿地や草地などの植生遷移や、人が手を入れ管理する

ことにより保たれていた生育環境が失われつつあり、多くの種が影響を受けていると考えられます。

また、今回の選定種に関しても、ラン科、キンポウゲ科、キク科の種が多く選定されており、これらは、一般的に花が美しく園芸用に価値があるため、採取が後を絶たない状況になっています。

【絶滅種等】

絶滅種は41種となりました。主なものとして、前回RDBで絶滅危惧ⅠA類(CR)にランクされた、サクラソウ、クロバナロウゲ、アキノハハコグサについて、いずれも県内で自生地がわずか1箇所しか確認されていませんでしたが、道路建設、自然遷移、河川改修等の影響により自生地が消滅し、絶滅と判定されました。

また、イヌシデ、イワツツジ、エチゴルリソウ、タカネヤガミスゲ、アオキラン、ムカゴソウ、ミヤマモジズリなど16種が今回の調査でも確認できず、最後に確認されてからおよそ50年を経過していることから、絶滅と判定されました。

一方、前回絶滅と判定された植物の中で、専門家の継続的、緻密な分布調査により、かつての産地や新たな産地からハナムグラ(約80年ぶり)、フサタヌキモ(約70年ぶり)等15種の生育が再確認されました。これらの種は、個体数や生息環境等の状況から絶滅危惧ⅠA類(CR)にランクを変更しました。また、2種がそれぞれ情報不足、誤同定による対象外と判定されました。

【絶滅危惧種】

前回(2004年)のRDBでは評価の対象外としていたもので、新たに絶滅危惧種と判定されたものは91種(CR39種+E N23種+V U29種)となりました。主な理由は、生育環境の悪化、個体数の減少等により生育の確認が困難になっているものが増加しているためです。

主なものとして、サデクサ、カラフトイチヤクソウ、アズマツメクサ、トガスグリ、オオバタチツボスミレなどを新たに絶滅危惧ⅠA類(CR)にランクしました。

また、アズマレイジンソウ、ヒロハノカワラサイコ、センダイトウヒレン、アオスズランは、生育状況の悪化や園芸採取などにより生育個体数が減少していることから、絶滅危惧Ⅱ類(VU)から絶滅危惧ⅠA類(CR)にランクを上げました。

コアニチドリ、エビネ、ギンラン、トケンランなど21種も生育の確認が困難となってきたため、同様に絶滅危惧ⅠB類(EN)にランクを上げました。

【ランクを下げた種】

調査の結果、分布範囲の広がりや新たな生育地の確認などで増加傾向にあることから、前回(2004年)のRDBで絶滅危惧ⅠA類(CR)、絶滅危惧ⅠB類(EN)としたもので、絶滅危惧Ⅱ類(VU)にランクを下げたものは、ドロノキ、ヤマミズ、ホザキヤドリギ、ガッサントリカブト、チドリノキ、テングノコヅチなど50種となりました。

また、前回(2004年)のRDBで絶滅危惧Ⅱ類(VU)としたもので、調査の結果、分布範囲の広がりが確認され、準絶滅危惧(NT)にランクを下げたものは、オオバヤナギ、ホザキノフサモ、チヨウカイアザミ、ザオウアザミ、アギナシ、クロモ、イトモ、ホッスモ、ミクリの9種となっています。

【絶滅のおそれがなくなった種等】

今回の調査結果から、分布域が広がり個体数も増加傾向にあることから、絶滅のおそれがなくなったと判断されたものは、サナエタデ、フクジュソウ、イワウメヅル、トウゴクマムシグサ、ナガエスゲ、ヒナスミレ、マツモ、オオニガナなど11種でした。

また、雑種と考えられるもの、誤同定のものなどと併せて、24種をレッドリストの対象外として除外しました。

(2) 蘚苔類(コケ植物)、藻類

蘚苔類(コケ植物)と藻類については、初めて評価、選定を行い、蘚苔類は43種、藻類は7種が選定されました。

蘚苔類(コケ植物)の主な減少要因としては、「自然遷移」、「森林伐採」などが主な理由となっています。また、藻類の減少要因は、その生育特性から「湿地、湖沼の開発」が主な理由となっています。

【絶滅危惧種等】

蘚苔類(コケ植物)は、絶滅危惧種(CR+EN、VU)と判定されたものは29種となりました。

主なものとして、ヒナミズゴケ、ナンジャモンジャゴケ、ヤワラスナゴケ、ナガミノゴケなど21種を絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)にランクしました。

また、ガッサンクロゴケ、オオシラガゴケ、カサゴケモドキなど8種を絶滅危惧Ⅱ類(VU)にランクしました。その他、準絶滅危惧(NT)としてコバノミズゴケ、ムラサキミズゴケなど8種、情報不足(DD)としてナガサキホウオウゴケ等6種を選定しました。

藻類は、絶滅危惧種(CR+EN、VU)と判定されたものは7種となりました。

主なものとして、キヌフラスコモ、サカゴフラスコモなど5種を絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)にランクしました。

また、オオイシソウ、シャジクモの2種を絶滅危惧Ⅱ類(VU)にランクしました。

8 注目される種のカテゴリーとその変更理由

(1) 維管束植物

○サクラソウ 絶滅危惧1A類(CR) → 絶滅種(EX)

山ろくや川岸の湿気の多い原野に生える多年草

前回(2004年)の調査で、土地開発などにより、鶴岡市など5か所での絶滅を確認し、現存地が唯一の自生地でした。今回(2011年)の調査で、自生地付近での道路建設による影響により自生地が消滅し、他に自生地の確認報告がないことから、絶滅と判定されました。

○ハナムグラ 絶滅(EX) → 絶滅危惧1A類(CR)

日当たりの良いやや湿った草地に生える多年草

1922年に村山市で採集された古い標本が1枚あるだけで、それ以降、採集や確認情報が全くなく、県内からは絶滅したものと判断されていました。同地域において、地元研究者により約80年ぶりに再確認され、その後、近接地でも確認されました。個体数が非常に少ないことから、絶滅危惧1A類(CR)にランクされました。

○フサタヌキモ 絶滅(EX) → 絶滅危惧1A類(CR)

低地のやや富み栄養の水質の池沼に生育する浮遊性の水草

これまで4か所で記録がありますが、1893年鶴岡市、1935年南陽市などの古い記録のみであり、前回(2004年)の調査でも確認されず、絶滅したものと判断されていました。鶴岡市の2か所に生育しているのが約70年ぶりに確認されました。個体数が非常に少ないことから、絶滅危惧1A類(CR)にランクされました。

○カラフトイチヤクソウ 対象外 → 絶滅危惧1A類(CR)

亜高山帯から高山帯の低木林縁や高山草原に生える常緑の多年草

今回の調査で、県内の亜高山帯から高山帯にかけて、約50個体が確認されました。既知の生育地での確認が非常に困難になっており、対象外から絶滅危惧1A類(CR)にランクされました。

○タチスゲ 対象外 → 絶滅危惧1A類(CR)

ため池や湿地などの湿った場所に生育する多年草

今回(2011年)の調査で、県内で初めて確認されました。生育地はわずか1か所であるほか、個体数は50個体未満で非常に少ないため、絶滅危惧1A類(CR)にランクされました。

(2) 蘚苔類(コケ植物)、藻類

○ナンジャモンジャゴケ 絶滅危惧I類(CR+EN)

高山や亜高山の岩場などに生育

県内からは文献記録があるのみで、生育地は確認されていません。特殊なコケで、茎の長さ約1cm、仮根はなく、葉は円柱形になります。大雪山、白馬岳、立山なども生育地となっています。分類学的にもっとも貴重なコケ植物の一つです。

○コシノヤバネゴケ 絶滅危惧I類(CR+EN)

溪流沿いの樹木の根元や地上に生育

主にブナ帯で川辺の樹木の基部や根元に着生しています。開発や河川工事などの影響で生育地が乾燥すると絶滅のおそれがあります。日本固有種です。

○キヌフラスコモ 絶滅危惧I類(CR+EN)

池沼、ため池などに生育

天然池沼、ため池など水深があり、岸部がヨシなどで被われている水域に生育します。現在池沼2か所で自生が確認されています。

9 山形県改訂レッドリスト（維管束植物・蘚苔類・藻類）選定種一覧

別添のとおり。

なお、改訂レッドリストに選定された植物種について、その分布、生息・生育環境、絶滅の要因などをとりまとめた、「レッドデータブックやまがた 絶滅危惧野生植物（2013年改訂版）」を発刊する予定です。